

千刈狸の呟き

後期高齢狸実録

今回は呟きではなく狸の絶叫を聞いてもらいたい。昭和8年生まれ以前を非礼不遜にも後期高齢者と仇名を付けた今の大臣達に該当者は一人も居ない。今月の新聞紙上で後期高齢者医療制度（長寿医療制度）と何時の間にか長寿と言い換えて本音を隠し始めた。戦中戦後を知らず長閑かに暮す多くの現代人に、この際、大正14年生まれの私の悲惨な体験を語って老人を見直して欲しいのだ。数少なくなった老人達は声も嘎れ、語る場も持たず歯ざしりして屈辱の日々を耐えているのだ。

私がまともに5年間の学業を終えて旧制本荘中学を卒業したのは昭和18年3月、そして進学のため上京した。戦局は敗戦に向かって加速、以下時系列に当時の少年少女たちの生活と、戦争を指導した明治生まれ達の取り違えた国策が如何に無益で辛く苦しい思い出を、我々後期高齢者に残したかを記載して些か悶えを取ることにする。

昭和19年（終戦前年）昭和8年生れの後期高齢者は当時小学6年生だった。この年7月、大都市の国民学校（小学校）初等科児童を農山村、あるいは地方都市に集団移動させた。いわゆる学童疎開である。家族と離れ見知らぬ土地で暮らしたつらい思い出しかないはず。中学校は勤労動員発令により学業は停止、学校を離れ集団で軍需工場に。私が卒業した18年はさほど強制労働の記憶が無く上京、その後の本荘中学の戦時生活は人伝に断片的に聞いただけだった。最近当時3年生の後輩に実際に聞いて戦中派少年の悲壮な実体に驚いた。学校とは名ばかりで、昭和19年4月から3年生は阿仁鉱山、4・5年生は船川へ、或いは群馬の中島飛行機、相模の造兵廠と終戦の年の20年6月まで軍需産業に動員させられ、10時間労働、昼夜2交代でという過酷な作業だったという。在校の1・2年生は松根油堀り、幼年学校、予科練、陸士、海兵と軍関係学校への志願も指導された。

昭和19年 東京

前年18年12月 文系学生の徴兵猶予廃止により代々木で学徒出陣を残った理工系や女子学生が見送った。飛び出して泣き騒ぐ女子学生を私も見たが、元気な若者の肅々とした行進で戦意を高揚した映像だけが残っている。

昭和19年 空襲

米国はボーイングB29の大編隊を組んで本土を空襲した。前期19年11・24～20・3・9まで

は軍関係施設の爆弾投下が、その後木造民家を狙う焼夷弾空襲が終戦当日の20・8・15日まで113都市延べ649回、死者51万、罹災者964万、第二次大戦死者の1/3、罹災者は5倍、東京は112回、日本中が焦土と化した。当時高円寺に居た私は新宿が見えるほど焼野原になって呆然としたことを思い出す。

3月10日深川周辺空襲のときは医科系の学生が集められ、隅田川兩岸を埋め尽くした黒焦げになった被災者を搬送した暗い記憶も残っている。

大学は学生の下宿や居住場所も無くなり、学年ごとに疎開した。私たちは秩父の影森で食事も儘ならない集団生活を始め、教授が講義に来るはずだったが、二度見えただけで我々は置き去られた。戦後8月15日から一ヶ月後、疎開先の秩父から東京に戻りはしたが住む所がなく、大学の空部屋や廊下でしばらく暮らし、大学も再開の通知が届くまで各自自宅待機となり秋田に帰った。食うや食わずの暮らしを続けた半年余り後に見た秋田の食卓の豊かさに驚き、敗戦の脱力感だけが記憶に残った。大学は10月再開した。

戦後の東京

敗戦は惨めなものだった。すべて占領軍（GHQ）の言いなりで終戦翌年の21年2月25日突然金融緊急措置令が発令され、切手ほどの証紙が一人当たり8枚配られ十円紙幣に貼ったもの以外使用出来なくした。それ以外は封鎖預金となり特定の場合を除き預金は下ろせなくなった。日本人全員が所持金80円、金持ちは居なくなった。上野は物乞いする戦災孤児であふれ、焼トタンで困った小屋や防空壕で、運良く配給されたバラックの簡易住宅に暮らす人々、食料、衣服も乏しくみな極貧の暮らしを強いられた中で復興に誰もが懸命に努力した。そして25年、朝鮮戦争が始まり米軍からの軍需景気が日本に活気を吹き込んだ。全国から集団就職列車に乗って上野の駅に降りた多くは後期高齢者達、この人たちが日本を再生する原動力になった。あの荒廃した日本を現在の先進国日本に育て上げた人は誰か。多くを語らないいわゆる後期高齢者達である。安住する現代人はこの先輩にどう報いるのであろうか。それが後期高齢者医療制度か。年金天引き削減か。働けなくなった後期高齢者は姥捨てなのか。

(隠居狸)